
名残酒

イズル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名残酒

【Zコード】

Z2169F

【作者名】

イズル

【あらすじ】

鬼哭村、九角屋敷に捕らえられた勇斗。九角の処置とは…。

(前書き)

HP掲載小説です

鬼哭村、九角屋敷。

天戒が住まうこの屋敷に、緋勇龍斗がやつて来たのはおおよそ一週間ほど前だつたろうか。

度々鬼道衆の行く手を阻んできた龍門組といつ組織の内の一人、それが緋勇。しかし大元はこの緋勇を連れてくる予定など天戒の頭には無かつた。元々彼が鬼道衆の面々に命じたのは、龍門組の一人である美里藍という女だったのだが、それが上手く事運ばず、結果何故だかこの緋勇という男が天戒の前に差し出されたのである。

澳継は相変わらずこの

「失敗」に対して

「でも」だの

「だつて」だのと言つていたが、同じくこの任務に同行した尚雲はそれよりかマトモな答えを返した。

確かにこれは目的の人物に非ず、しかしこれは大した大駒である、と。

「若、この男はかなりのやり手ですよ。龍門組には蓬萊寺という男がいて、おそらくこの緋勇と共に組織の要になつてゐるんでしょう。要するに……」

「この緋勇を使えば、自ずと龍門組は現れる……と。そういう事だな？」

「はい」

なるほど、若しもこの男が要であるといつならそれも面白い話かもしれない。

美里藍を攫う事については、菩薩眼という理由の他にもある個人的な理由が存在している。それは天戒の口から語られてはいないが、おおよそ尚雲はそれに気付いているのだろう。

だから、そこまで事を運ぶ為にも、この意外な大駒は使えるのだ

といつぱりのである。その尚雲の意見は、天戒を頷かせた。

「やうだな。この男には暫し我らと共に行動して貰うとしよう。そうすれば必ず菩薩眼は我が手中に入るところの…まずはこの男を休ませねばな」

「休ませるつて…！御屋形様、そんなヤシビツでも良こじやないですか。どつかに放り込んでおきましょ」

突っかかるようにいつぱりの奥に、天戒は静かに笑う。

「我らと行動する以上、襲うにする訳にもいかんだろう。いわばこの男は大切な客人という訳だ。なあ、尚雲？」

「はい」

「モッ、モッだけど…」

さつぱり自分に分が無い」とに苛立ちつつも天戒がいつぱり以上は何も反論できない奥緒は、むくれながらもそっぽを向く。それを見ていた桔梗は、ふふ、と笑いながらも奥緒をからかつた。

「坊やは思春期なのかねえ。まあ、やり手の兄さんがいたんじゃ自分立つ瀬がないって処かい」

「何だと？」

相変わらずの二人のやり取りを見ながら笑った天戒は、目下問題の人物である緋勇龍斗に目を落とし、その表情をすっと変化させる。

龍門組の要。

しかしそれ以上の何かを思わせる不思議な

「氣」…それに気付いていた天戒は、尚雲の提案たる生贊としての価値よりも、その不思議な

「氣」の持ち主としての価値を考えていた。

一週間という時の流れ、その中で何度も龍門組と出くわす場もあつた鬼道衆だったが、天戒はその報告を受けても尚、自ら龍斗を出向かせるという指示をしなかつた。

澳継などは直ぐにでも龍斗をエサとしてぶら下げるべきだと訴えていたが、司令塔である天戒がそれを良しとしない限り実現は叶わない。だから特別それに批判をするという事は無い面々だったが、それでも何故天戒がすぐにそれをしないのかという部分には多少なりとも疑問を渦巻かせていた。

そして最も疑問であつたのは、天戒が龍斗を九角屋敷に置いているという事実である。普通であれば、澳継の言つたようにどこぞへ放り込むまでしないまでも、適当な家に住まわせるのが常道である。しかし天戒は己の屋敷である九角屋敷の、しかも自室の中に龍斗を置いていたのだ。

まるで寵愛を受けた小姓か何かのようである。

それについては、長年天戒に仕えてきたにも関わらずそこまでを許された事が無い尚雲も大きな疑問を抱かざるを得なかつた。当初は頭になど無かつたはずの緋勇龍斗が、何故そこまで天戒の心を奪つたのか……そうだ、これは心を奪つたとしか言いようの無い状況である。

しかしそれを、誰も尋ねることは出来なかつた。たといそれがどれ程奇妙な状況であろうと。

ある夜、そんな天戒がどうしても氣になつて仕方なかつた尚雲は、異例ながらも天戒の自室に足を向けた。澳継はともかく桔梗までもが不思議に思つてゐるこの状況、それを問える者があるとすれば大方自分くらいだらうと思つ。嵐王あたりも天戒の信頼は厚いが、彼はどうやらこの事態よりも己の研究が大事であるらしい。

天戒の自室には、灯りがともつてゐた。

「…若」

障子の向こう側に向けて、尚雲は押さえ氣味の声でそう呼びかける。

すると、密やかに続けられていた話しがピタリと止まり、やがてその障子が開かれた。尚雲がその障子の向こうに手をやると驚いたことにその障子を開けたのは龍斗であつたらしく、龍斗は尚雲の顔を確認して一つ頷いたりしてゐる。どうやら天戒の指示らしい。それを受けた中程まで進んだ尚雲は、其処に晩酌をする天戒の姿を見た。

いつもだつたら桔梗あたりが隣にいるはずの場面だらうが、どうやらこの様子だと龍斗がそれに変わる役を務めているらしい。

天戒は、やつてきた尚雲に目を移し、この夜分に一体どうしたのだ、と問う。

「…若、今日は失礼を承知でお聞きしたいことが」

「俺に問いたい事？ 一体どのよつたな事だ」

「……」

尚雲は、すつと龍斗に手を遣つた。

龍斗はこれといつ喜怒哀楽を感じさせない普通の表情をしており、これから尚雲が言おうとしている事など予測できていないふつである。

しかし尚雲にとって、仲間とはいぬ男とはいえ、正に彼の目前で彼を非難するような言葉を吐くのは、少々気が引ける事だった。とはいえ、天戒がそれを問うのだから言わないわけにはいかない。

「…澳継も桔梗も、この状況には疑問を持っています。このままでは、我ら鬼道衆の覇氣にも影響が出るかと」

「「」の状況とはどういう事だ。具体的に言つてみる、尚雲」

「しかし…」

言ひよどりで、尚雲はまた龍斗を見遣る。

それを見透かしてか、天戒は猪口を手にしたままフツと笑つた。

「田は口程に物を言つ…とは良く言つたものだな、尚雲よ。お前に言いたいことは分かつた、要は緋勇の扱いが不当だと、そう言つたのであらう?」

「不當だなどと…。…ただ、菩薩眼を手中に収める為にもやうやく動くのが良策だと思います。あまり長く鬼哭村に置いていても…」

「隠れずとも良い。お前達は菩薩眼よりもむしり「」の俺の動向に疑問があるのだらう。緋勇を此処に置き、晚酌をもせぬ…つまりは其処が気に喰わんという事だらうが」

「若…」

そこまで分かつてゐるならば何故そうするのか、そう言いたい尚雲の眼を見ながら天戒は猪口を口にやる。まるで今宵の晚酌を例に違わず愉しんでいるといつ具合に。それは尚雲にとって、目上の者でありながらも常に親近感を覚えてきた天戒その人とは思えない何かを思わせた。それよりも、どこか遠い存在であるような…そんな感覺。

「…氣に病むな、尚雲。やがて時は巡る、さすれば俺も動かずにはいられまい。是はそれまでの間の…名残といつものだ」

「名残…？」

聞き返した尚雲に、天戒はそれ以上を返さなかつた。その名残が何を意味するのか、それを説明しようといつ氣は無いといつ事らしい。

その事実は、さか尚雲の心に雲を差したが、それでも当初の疑問への答えは出ていた。天戒は

「やがて日は巡る」

と言つたのだから、このような摩訶不思議な状況が続いとやがてそれも終わるということを示唆しているのだろう。但し、それが何時のことなのかは示されていないが。

「…分かりました。俺は若を信じています。…では」

これ以上此処にいても、もつ話は続くまい。

そう判断した尚雲は、その言葉を最後にその部屋を後にした。

尚雲の去つた後の部屋では、相変わらず猪口を口に運ぶ天戒と、

そして龍斗の姿があつた。

今しがた去つていつた尚雲を思い、龍斗は少し陰をもつて天戒を見遣る。

龍閃組である自分が鬼道衆の村に捉えられている現実が何を意味するのか、それは龍斗にも良く分かつていて、こと天戒のこの甘い待遇には彼もやはり疑問を覚えていた。鬼の面々と同じく、やはりそれを疑問に思つていたのである。しかしそれは高待遇でもあるのだから文句を言うのもおかしいかもしれない。

「…九桐は本当に納得したのか？」

「…九桐は本当に納得したのか？」
氣に病んだふうにそう聞いた龍斗に、意に介さないといったふうに天戒が笑う。

「納得などできんだう。俺が九桐であれば、少なくとも納得などせんな」

「だつたら何であんな事言つたんだ？九桐は九角を信じて此処に來たんじやないのか」

「お前は不思議な奴だな。敵であるお前が俺達”鬼”にそのような事を言つとは。…まあ、それだから俺はもたついているのだろうな」

「何？」

思わず首を傾げた龍斗に、天戒はやつとのこと猪口を膳に置いた。そして龍斗に向き直ると、腕を組んで先ほどの言葉を繰り返す。それは、尚雲に言つた言葉と同じものである。

「やがて時は巡る、さすれば俺も動かずにはいられまい。是はその刻までのせめてもの…名残だ」

「名残…」

一つ頷いた天戒は、尚雲には説明しなかつたその「名残」という言葉についてを、龍斗に向けて語り始めた。

名残とは、”名残惜しい”を意味する言葉。

そう解釈すれば直ぐにも解けてしまつ天戒の言葉は、龍斗に少なからず衝撃を与えた。

「お前は不思議な”氣”を持つてゐる…それが妙に心地良い。おかしいであろうな、俺がこんな事を言つるのは。だが俺はその”氣”に触れるでいると…」

その氣に触れていると、まるで解放された気分になる。

何もかもから、解放されたような気。

それはとても不思議な気持ちで、本来ならば守るべき大切なものが、倒すべき敵など、そつといた全ての

「こわだり」や

「わだかまり」をまるで小さな塵と化してしまつような気持ちだった。

大切なものを守る気持ちと、敵を憎む気持ちは、同じ線の上に存在している。

大切なものを守りたいから敵が憎く、敵が憎いからこそ大切なものは守るべきだと考えるのだ。

しかしそれら全ては常に強い意志を携えて行動を起さねばならぬもので、当然無意識の気の張りが出るのは当然だった。それを嫌だと思ったこともないし、むしろそれは今迄原動力でもあったわけだが、もしそれらが無くなつたとしたら恐らくは自分の自分たる所以すら危ぶまれそうな… それ程にそれらは大きなものなのである。龍斗の不思議な”氣”に触れそれらから解放されると、天戒はそ

れらを一時的に放棄する事ができた。放棄したいのではない、単に
そのような気持ちになるのである。

その中で感じるのは、自分が自分たる所以である

「こだわり」や

「わだかまり」を放棄したとしてもやはり自分は自分だといふこと
であった。

それは、想起させる。

もしこのような道を歩まなかつたらば自分はどうなつていたか
を。

どこかで安穏とした生活をするにしても、幕府にひれ伏すにして
も、どんな状況であれ、自分はきっと 生きていたろう。
「」のよつな茨の道を歩まずとも、恐らくは。

「…解放… そうだな、言いえればそれは安堵というものだ。俺は
お前といふと安堵を覚える。それが妙に心地良いのだ」

「……それは、どう受け取つて良いのか…」

困つたようにそう言つた龍斗に、天戒は声を上げて笑つた。

「別に悩む必要などないぞ。俺はお前に何を求めてもおらん。やが
てお前は龍閃組に帰る事にならう、あの仲間の元にな」

「帰る?といつことは…俺を無事で返すつもりなのか?」

まさかそんな事があるだらうか、そう思つていた龍斗に、天戒は
目を伏せる。

菩薩眼を捉える為の大駒である龍斗をそのまま無事に帰す事、そ
れは鬼道衆の長としてはあまり良い選択ではないかも知れない。い
ずれ大きな問題となるう龍閃組の人間ならばこの機会に始末してお

くのが当然良いのは分かつていてことだ。

しかし天戒には、薄々感じてきた龍門組への違和感と共に、こうして知つてしまつた不思議な“氣”がある。それを踏まえると、それに対して無碍に手を下すといつのはいたしか良い選択とは思えなかつた。

それは、例え敵対する相手であろうと、大切なもののように感じたから。

その不思議な“氣”があれば、この世に元々そのような安堵があるのだと思えるから。

「…まあな。だからそれまでの間は その安堵を俺にくれはしまいか？」

「九角…」

「今宵の名残の酒だけで良い。只それだけの事で良いのだ。他には…望まん」

敵である以上それ以外を望めるはずもない。
それを知つた上で、天戒はそれを口にする。

明後日…いや、明日にでも龍斗を解放するだらう天戒にとつて、今宵の名残酒は最後の晚餐も同様。それからはまた、桔梗の手酌で酒を煽ることになるだらう。

そんな天戒の心境を知つて、龍斗は徳利に手をかけた。そして、その中の酒を天戒の猪口に注ぐ。

「じゃあ、この徳利が終わるまでは」

そう言つて差し出された猪口を受け取つた天戒は、すまないな、
と言ひながらもそれを口に運んだ。

今宵最後の、名残酒。

「…お前が龍閃組でなければ…呑、お前と違つ形で出来てしまは
…」名残”にもならなかつたらうて、な

「…無理な事を言ひなよ」

「違ひない」

釘を刺され笑つた天戒は、名残ついでにもう一呑口にしてようとしていた言葉を、猪口の中の酒と共に流し込んだ。
言ひべきでは無い言葉は、口ひして流し込むに限るのである。今宵の名残酒と共に。

永劫傍に置く事が出来たらば、名残こそ名残惜しからう。

。つい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2169f/>

名残酒

2010年12月7日14時30分発行